

三浦半島南部におけるネアカヨシヤンマ およびカトリヤンマの記録

川島 逸郎・辻 功

Itsuro Kawashima & Isao Tsuji: Records of *Aeschnophlebia anisoptera* Selys and *Gynacantha japonica* Bartenef (Odonata: Anisoptera: Aeshnidae) from the Southern Part of the Miura Peninsula, Kanagawa Prefecture

はじめに

近年、各地でトンボ目の減少が顕著となっているが、とりわけ神奈川県においては、平野部～低地のほぼ全域に開発が及んだ現況に伴っての水系環境の貧弱さも、それに拍車を掛けている。その結果、一般には普通とされる種までが、絶滅危惧種のリストに含まれる状況に陥っている（苅部ほか、2006など）。こうした種のうち、県下でも減少が著しく、三浦半島からは既に絶滅したとみなされていたネアカヨシヤンマ *Aeschnophlebia anisoptera* Selys および、同半島からの絶滅が危惧されるカトリヤンマ *Gynacantha japonica* Bartenef が、従来記録のなかった半島南部の三浦市から得られたため、ここに報告する。

採集・目撃記録

ネアカヨシヤンマ

1♂（図1）、神奈川県三浦市原町、2009年7月10日、田中義生採集。

本個体は、採集時は完全であったが、辻が勤務する小学校での理科教育に供した際、各翅先端に破損を生じた。

1♂ 1ex., 神奈川県三浦市岬陽町、2009年7月19日、辻・川島目撃。

カトリヤンマ

1♂（図2）、神奈川県三浦市岬陽町、2009年9月16日、内田一摩採集。

上記の標本はいずれも、神奈川県立生命の星・地球博



図1. 三浦市産ネアカヨシヤンマの♂標本.



図2. 三浦市産カトリヤンマの♂標本.



図3. ネアカヨシヤンマの黄昏飛翔が観察された地点の景観. 狭小ながら谷戸地形を形成.



図4. 図3の谷戸地形の右側斜面を臨む. 主にこの上空で、黄昏の摂食飛翔が観察された.

物館に収蔵される予定である。

採集・目撃場所および状況

ネアカヨシヤンマ

採集個体は、原町の住宅地内にある農家の、室内の電灯に迷入飛来したところを捕獲され、辻まで届けられた。一方、黄昏飛翔が観察されたのは岬陽町であるが、両町は面積が狭い上に隣接しているため、採集・観察地点は、直線距離にしておよそ 300 ~ 400m 隔たっているにすぎない。これら両町を併せた地域は、住宅が密集し、本種成虫の生活圏となりそうな樹林や藪は残っていない。その東南側に隣接する宮川町付近も、ほとんどが耕作地や荒地として開けているため樹林は少なく、斜面や路傍などに木立がわずかに残る程度である。両町と宮川町の境界付近には、狭隘な谷戸状の地形が残る一角(図 3)が、かろうじて 3ヶ所程残存しているが、谷戸底に当たる部分は、かつては湿地であったものの、現在はほぼ乾燥化しているか、または狭い畑となっている。

黄昏飛翔の観察地点(図 3, 4)では、最奥部にはごくわずかに湿った場所がみられるほか、東南側には最大幅 1m 程度の小川が流れ、アサヒナカワトンボ *Mnais pruinosa* Selys, コシボソヤンマ *Boyeria maclachlani* (Selys) が生息する。7月19日の観察では、本種は 2 個体が同時に観察された。黄昏飛翔は 18 時 15 分過ぎから始まり、19 時前には終了した。その間、ヤブヤンマ *Polycanthagyna melanictera* (Selys) 1 ♂とウスバキトンボ *Pantala flavescens* (Fabricius) 少数の飛翔も同時にみられたが、それらすべてが姿を消した 19 時になると、比較的多くのコシボソヤンマ未熟個体の黄昏飛翔が始まった。本種は当初、比較的高空の狭い範囲(図 3)を飛び廻っていたが、その内 1 個体は、筆者らの近距離を目線程度の高さで通過した際、♂であることを認めた。2 個体共、翅は薄く褐色に煙っており、よく成熟しているとみなされた。

カトリヤンマ

記録個体は、辻が勤務する小学校玄関(岬陽町)に迷入したところを拾得された。岬陽町は、ネアカヨシヤンマの項で述べた通り、住宅で密集しており、本種成虫の生活圏となりそうな樹林や藪もほぼ消失している。本種は、湿地や休耕田、低湿地を主な生息水域とするが、同町を中心とした近隣地域には、発生が可能な水域は全く存在しない。採集個体はよく成熟していたが、汚損もなく新鮮な状態であった。なお、近隣地域を含めて探索を行ったが、追加個体は確認できなかった。

三浦半島における生息状況の変遷および考察

ネアカヨシヤンマ

本種は、日本本土に分布するヤンマの中でも、従来より稀少であったことに加え、主な生息地である湿地環境の破壊により、近年さらに激減しつつある種である。神奈川県では、過去に湘南地区から比較的多く記録されて

いるが、最近の情報はほとんどなく、その他の地域では、川崎・横浜地区および三浦半島地区から、単発的な記録が少数あるにすぎない(荻部ほか, 2004 など)。こうした背景と推移から、「神奈川県レッドデータ報告書 2006」では、絶滅危惧 IA 類に指定されている(荻部ほか, 2006)。三浦半島における本種の記録は、横須賀市山中町からの 1 ♀(大場・石渡, 1979)が初めてのものであるが、以降は、葉山町下山口の 1 ♀(川島, 1993)のみで、その後の情報は途絶えていた。

今回確認された個体は、成熟度は高かったものの比較的新鮮な個体であることから、前年に他地域から迷入した個体によって産卵されたものが、原町・岬陽町と宮川町との境界付近にわずかに残された谷戸底の湿った部分で、一時的に発生した可能性も考えられる。上記地区以外の三浦市内においては、本種が発生可能な湿地環境および成虫の生活圏となり得そうな、ある程度広い面積をもつ樹林帯は、初声町三戸または三崎町小網代以外には皆無である。また、逗子市以南の三浦半島全域からも、本種の生息に適した水系環境は、現在はほぼ消失している。

これまでの調査からは、同市付近に本種が定着している可能性はきわめて少ないとみなされるが、恐らくは、別の発生場所から移動分散した個体が三浦市まで辿り着いた結果、一時的な発生を見たとき考えるのがより自然と思われる。しかし、その大元の発生地が、現在も湘南を中心とした神奈川県内にあるのか、あるいは東京湾を隔てた房総半島由来なのかといった点は不明である。

カトリヤンマ

本種は、従来は平野部~丘陵地の水田地帯を主な発生域とし、むしろ最も身近な種の一つであったと思われる、県内においても広範な地域から記録が残されている(荻部ほか, 2004 など)。しかし、恐らくは、農薬散布や水田の乾田化など耕作形態の変化(湿地の消失)を主な要因とし、近年の減少は著しい。こうした背景を受けて、上記「神奈川県レッドデータ報告書 2006」では準絶滅危惧に指定されている(荻部ほか, 2006)。三浦半島においても、過去の記録からは、かつては広く生息していたらしい形跡は読み取れるものの、1990 年代前半の時点で、確実な生息場所は葉山町下山口の 1 地点(下山川沿いの湿地 3 枚で、現在は絶滅)のみとなっていた(川島, 1993)。かつて比較的記録の多かった同町二子山周辺(大場・石渡, 1979 など)でも、1988 年の時点でまったく再確認できなかったため、恐らくはそれ以前の年代に、やはり湿地環境を好み、同所的な記録の多かったマユタテアカネ *Sympetrum eroticum eroticum* (Selys) の激減と年代を同じくして衰退していたものと想像される。ちなみに現在は、二子山に至る長柄付近から桜山大山林道にかけての湿地もほぼ宅地化され、本種やマユタテアカネのみならず、一般的には普通種とされるシオヤトンボ *Orthetrum japonicum japonicum* (Uhler) の発生すらも危惧される状況となっている。葉山町ではその後、角田(2005)や荻部ほか(2006)により再確

認がなされてはいるが、生息状況に回復傾向は見出せず、三浦半島域での絶滅が危惧される状況には変化がない。かろうじて発生が見込めるのは、現在もわずかながら湿田が残されているといった理由から、やはり同町を中心とした地域以外にはないよう思われ、たとえば下山口では、2009年9月27日にも1♂を目撃している。ただし、現在も景観的には本種が生息可能と思われる水田は、上山口およびその近隣などに残存してはいるものの、本種はまったく確認できていない。そうした状況から勘案すると、仮に発生地が残っていたにせよ、その範囲はきわめて狭小かつ限定的で、個体数も僅少であろうと推察される。

一方、三浦半島における本種の記録南限は、横須賀市野比(野比昆虫調査会, 1990)であるが、この地域においては、当時でも目撃記録1例にとどまっていた。少なくとも1987年以降では、本種は同市南部の武山丘陵までは分布しており、その1例が、同丘陵の北東麓に当たる弓木山(川島, 1993)からのものである。しかし、記録の時点で、すでにきわめて稀な状況にあったため、発生水域は特定できないまま再確認は困難となり、現在に至っている。その近隣では、コウロから井ノ上を経て四ツ田といった長沢一帯の地域にも水田は多かった(現在は横須賀リサーチパーク(YRP)の造成により完全に消滅)が、やはり本種の確認はできなかった。ちなみに横須賀市内においては、現時点で確実な産地は知られていない。

なお、三浦市では、今回の記録地に近い三崎町小網代および初声町三戸周辺には、現在も湿地環境は存在しているが、これまで本種が確認された例はない。三戸においては1990年代前半まで、谷戸の入り口一帯に、廃棄後やや年数を経た水田からなる開放的な湿地が広がっていた(現在は残土埋め立てにより消失)が、その当時でも本種は生息していなかった。三浦市からの記録自体がこれまでまったく存在しない(大場・石渡, 1979; 川島, 1993; 苅部, 2004 など)ため、古い年代にはこの地域

にも生息していたのか、詳細は不明である。現在、半島南部からは、本種の発生に適した、湿田や水深の浅い小規模な池沼はほぼ消滅していることから、今回の記録個体は三浦市およびその近隣で発生したものではなく、他地域からの分散・迷入個体と見るのが最も自然であろう。その発生場所としては、三浦半島北部に僅かに残された産地か、あるいは房総半島などが考えられる。

謝 辞

ネアカヨシヤンマの記録個体を採集し著者まで届けて頂き、この度の調査の契機をもたらされた田中義生氏(三浦市)、カトリヤンマの記録個体を拾得し著者まで届けて頂いた内田一摩氏(三浦市)に、まず厚く御礼申し上げます。また、日頃より意見交換などを頂き、今回の投稿に当たっても様々な示唆や助言を賜った、高桑正敏博士および苅部治紀氏(神奈川県立生命の星・地球博物館)に深謝申し上げます。

引用文献

- 苅部治紀・川島逸郎・岸 一弘・石川 一, 2004. トンボ目 Odonata. 神奈川県昆虫談話会編, 神奈川県昆虫誌 II, pp.67-130. 神奈川県昆虫談話会, 小田原.
- 苅部治紀・川島逸郎・岸 一弘, 2006. トンボ類. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久編, 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp.311-324. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 川島逸郎, 1993. 三浦半島のトンボ相. かまくらちょう, (30): 1-23.
- 野比昆虫調査会, 1990. 横須賀市野比の昆虫類. 横須賀市博物館研究報告(自然), (38): 61-80.
- 大場信義・石渡裕之, 1979. 三浦半島のトンボ. 横須賀市博物館資料集, (3): 1-15.
- 角田 亘, 2005. 葉山町下山口のカトリヤンマ健在. かまくらちょう, (62): 32-33.

川島逸郎：日本蜻蛉学会

辻 功：三浦市岬陽小学校